

第百十五回碌山忌記念講演会

アートが拓く地域力

姜尚中氏（政治学者、東京大学名誉教授）

日時：二〇二五年四月十九日（土） 十三時半～

会場：穂高会館講堂



姜尚中氏

どうも、今日はこんなにたくさんお越しただいてありがとうございます。

私昨日熊空港から五時二十五分だったでしょうか、それで着いたのが七時三十分近くで、いや七時三十分よりもっと遅れてましたね。それで全日空の飛行機だったので、羽田の第二ターミナルを降りるとですね、大体、降りてから七百メートルくらいあるんですね。皆さんご利用になった方はお分かりになると思いますが、かなり七百メートルという結構歩きます。それで結局あれやこれやで結局新宿発最終のあずさに乗れなかったんですね。それで急遽都内にホテルに投宿しました。

そしたらこちらの方で地震の報があり、驚きました。この辺りは震度四だったんでしょうか。で、熊本は四月十六日に熊本大地震がちょうど九年前におきたんですね。前震と言われているものが四月十四日。その時は私は熊本城を望むあるホテルの十階におりましたけども、さすがに動転しました。

私が館長を務める熊本県立劇場の仕事を終えて、翌日、当時客員教授をしていた都内の大学の講義のため、上京する予定でいたのです。

しかし、地震のせいで交通機関は寸断されているようでし、空港からそれほど離れていない益城町周辺が被害が起きやすいというので、急遽とにかくタクシーで福岡空港まで行き、そこから羽田に辿り着くようにしたのです。空港まで数時間かかりましたね。そこから東京に出て、そして大学の講義は終わって長野県内の自宅に帰り、安堵していたら、十六日の真夜中に「本震」が熊本県内を直撃し、朝、そのことを知って愕然としました。

自然災害、特に地震と日本列島との関係を考えて何か慄然とさせられるものがあります。この時に大地震が起きたんですね。

私が先ほどお話しした熊本県立劇場での仕事をやる前日まで、実は共同通信という通信社と一緒に震災関連の取材をし、現地を地元の新聞の記者の方々と一緒に震災当時の方々の生の声を聴いたりしていたのです。

阪神淡路大震災が一九九五年でバブル経済崩壊とほぼ重なりますし、それから十六年後、東日本大震災が起き、改めて日本列島に生きることは、繰り返される震災と共に生きることであることを知らしめられたわけですね。

よく「失われた三十年」と言われますが、その始まりに阪神淡路大震災が起き、その中間点で東日本大震災があり、そして熊本地震が大地を揺るがしたわけです。今後、南海トラフ地震も含めてどんな災害が日本列島を襲うことになるのか、わかりません。

今日お話しする碌山美術館と熊本県との繋がりですが、パリ留学時代に萩原守衛が、阿蘇を舞台とする夏目漱石の『二百十日』（一九〇六年発表）を愛読し、登場人物である「碌（ろく）さん」の台詞や雰囲気

真似ていたこと、あるいはそのキャラクターに親しみを感じていたことから、自身を「碌山」と称するようになったと言われています。

漱石というと、どうしても『坊ちゃん』で有名な松山が地名として思い浮かぶ人が多いと思いますが、漱石は熊本に四年数ヶ月滞在していました。その漱石が、碌さんと圭さんという、弥次さん、弥次喜多道中のようなユーモラスで社会風刺を散りばめた小説が、『二百十日』です。

この作品の最後は、阿蘇の噴火になぞらえて社会の不義への憤怒を露わにしていますが、漱石にして珍しいほど勸善懲惡的なトーンの小説で、碌さんと圭さんという市井の律儀な人々に託した漱石の思いが迸っています。恐らく、この律儀と真面目さ、ひたむきさを備えた碌さんのキャラクターに守衛さんもいたく感激したんでしょうね。

逆に言えば、碌山さんが漱石と同じ思いを分かち持っていたとも言えます。漱石と碌山とは年齢はちよどひとまわりほど違ってはいますが、もし二人が出会う機会があれば、きっと碌山は木曜会の常連になって異彩を放っていたはずですよ。

私は例の新宿中村屋の創業者、相馬愛蔵と夏目漱石、さらに相馬黒光との関係については不案内ですが、漱石が愛蔵と交流があり、そのことを碌山が知っていて、一層『二百十日』の碌さんに親近感を抱いたのかもしれません。何とも、漱石がいうように、人は「縁(えにし)」で繋がっているものですね。

それにしても、漱石は、阿蘇の噴火や地震を実際に体験したわけではないですが、それでも漱石来熊の明治二十九年(一八九六年)よりほぼ七年前、明治二十二年(一八八九年)には「明治熊本地震」が発生し、大きな被害をもたらしました。熊本城も、今回の熊本地震と同じように一部が損壊したと言われています。また、この地震は、それこそ地球の裏側で起きた地震が遠隔地の別の場所で計測されたという意味で地球物理

学的にもかなり注目された地震でした。つまり、ドイツのポツダム重力計に地震波が記録されたわけですね。

漱石が来熊した頃はかなり復旧が進んでいたのか、私を知る限り、地震への言及は見当たりません。もしかして、私の知らないところに漱石なりの言及があるのかもしれませんが。

因みに、実は熊本地震の「前震」の前日、熊本市内は漱石来熊一二〇周年を祝う盛大なセレモニーが行われ、市内が歓迎の行列で賑わっていました。

それが、翌日、暗転し、あのような甚大な被害に遭うことになったのです。

「災害は忘れた頃にやってくる」とは、よく耳にする言葉ですが、ご存知の通り、漱石の高弟で物理学者でエッセイストとしても有名な寺田寅彦の言葉とされています。漱石の旧制五校時代の生徒で漱石を慕っていた俊英のひとりですね。

後に寺田は、関東大震災を経験し、後に「天災と国防」というエッセイを発表していますが、天災に備えることは、国防に勝るとも劣らない重大事だという指摘は、今でも傾聴に値する提言です。

こうしてみると、何かすべてが「縁(えにし)」によって繋がりが、あらゆる物事は、単独では存在せず、他との関わり(条件・原因)によって生じると言えます。

その点で私とここ安曇野との関係も、「縁」によるものと言えます。なぜなら、私の恩師、藤原保信先生が安曇野の農業高校を出られて、早稲田大学政経学部の政治学の教授になられ、その「縁」で私は先生の弟子のような立場でお世話になったからです。先生との「縁」がなければ、私はこうして大学を職場とする研究者になつていなかったと思いますし、また、パブリックコメンテーターのような仕事をすることもなかったと思います。

そして、本日、講師として招かれた「縁」で、何と丸山善太郎さんという、高校時代の藤原先生のご親友とお会いする機会に恵まれたのです。娘さんもご同伴され、丸山さんが大事に保管されてきた藤原先生からのお手紙や葉書をいただきました。私のようなものに保管を委ねられたことは、感無量の気持ちでいっぱいです。

お会いして藤原先生が、高校を出て東京湾近くの工場で働くことになり、その当時の寮から丸山さんに出された手紙の文面を読んで思わず、涙が出て止まりませんでした。

当時、学校を出たばかりの若者が、東京の雑踏と喧騒の中で先生と同じような立場の仲間と人生と社会について真摯に議論をし、社会の格差や世間の冷たい仕打ちに憤りながら、それでも理想を語り続ける姿が彷彿として、若かりし頃の先生が甦って来るようでした。

藤原先生と最初お会いした時、私も高校時代野球をやったもんで、まあまあ背が大きい方なんです。藤原先生も結構背が高く、そしてなんとなくこう、どういうか、良家の坊っちゃんというイメージだったんですね。で、しかも有名大学の教授でもあるし。しかも、先生がいつも語ることは、理想を求める知の情熱と宥和に満ちたコミュニケーションでした。そんなわけで、藤原先生は、家庭環境が良くて、エリートとしてアカデミズムの階段をのぼって来られた人だというイメージを持っていました。生意気にも、当時、まだ学園紛争の余燼が燻っていたこともあり、たまたま先生の理想主義にあえて疑問符を付けることがありました。

「先生はそんなに理想的なお人をおっしゃるけど、現実はどうではないですか」と、まるで世古に長けた保守主義者のようなことを述べていたんですね。それでも、先生は笑顔を絶やさず、私のことをあたたかく守ってくれました。

そして、無念にも先生が召された後、藤原先生が実は昼間は紡績工場に勤めて、大学の夜間のコースを経て、大学院に入り、そして大学に職

を得て、シカゴ大学に留学され、その後、早稲田大学政経学部の政治学の講座を担当されるようになったことを知りました。

そのような苦節の日々を、先生はおくびも出さず、学生の指導と研究に専念され、大学人として生きられました。

先生から学んだことは、目に見える価値だけでなく、目に見えない価値がいかに重要かということです。この意味で政治と芸術には共通した面があります。両者とも人間の生活の中でこれほど価値とかわる領域は他にないからです。しいてあげるとすれば、宗教があるでしょうが、宗教も政治と、そして芸術と関わりを持っています。

先生は、人間と自然、人間と人間の関係のあり方を問い直す野心的な政治哲学を打ち立てたいと切望されました。志半ばで召されましたが、環境倫理学や自由主義以後の公共性の再建など、現在から見るとても予見的な仕事を残されました。

自然災害やそれに伴う原発事故など、シビアアクシデントがいつ起きるのかわからない時代を迎え、さらに紛争が頻発する世界になり、私たちはいま、私たちが依拠すべき価値とは何なのか。また、その価値を私たちはどのように育み、継承し、伝えていくことが出来るのでしょうか。

しかも、私たちは今、明日は何が起きるのか、予想も想像もつかない「不確実性の時代」を生きています。

私たちの身近な生活を見ても、円安や金利や株価、さらに地域経済の盛衰など、様々な不確定要因が絡んで、なかなか先が見えず、何を頼りにしていいのか、多くの人々が苦慮しているのではないかと思います。

資本主義を中心とする戦後経済の孕む不確実性について、例えばアメリカの著名な経済学者ガルブレイスは、もう半世紀ほど前から、その構造的な要因を指摘し、今日の時代を予見していました。

特に、九〇年代に入ってからですね、VUCAという言葉が流行りました。これは英語の頭文字を取って、一つは変動性 Volatility という。例えば

この間トランプ氏が相互関税、あるいは関税の話を出した途端にニューヨーク市場はだいたい百兆円から百五十兆円のお金が消えてなくなったんですね。これを経済学者の専門用語でヴォラティリティ Volatility という。要するに揮発したということです。なくなった。株価がいつべんに下がってしまう。こういう予期しない変動が起きる。NISAや新NISAでなんとかと思つてたら、突然としてこういうふうには、株価が暴落すれば、当然それは株式市場の価値がなくなっている。これもよくわからないわけですね。玄人でもわからないんですから、われわれ素人がわかるはずないんです。そういういわばその変動性。それから、不確実性 Uncertainty です。そしてもう一つ重要なことが複雑性 Complexity とのことです。複合性とはどういうことかというのと、これは皆さん、リーマンショックを思い出していただきたいんですね。リーマンショックはなぜ起きたのか、皆さんの中にあの時にリーマン・ブラザーズというヘッジファンドがあるということを知っていた人はほとんどいないんじゃないかとおもいますが、僕も知りませんでした。リーマン・ブラザーズというこれは新興のたぶんこれはユダヤ系の資本だとは思いますが、そのヘッジファンドがこれは破産してると。なぜそれが巡り巡って、株価が大暴落につながるのか。そして一時期、大変なショックでした。トヨタですらも減産を強いられる。いやこういうこととって、われわれが知らないところで起きた出来事が巡り巡ってわれわれの生活を直撃する。それぐらい、グローバル化しているのは、もうありとあらゆるものが結びついてしまったわけなんです。だからここだけは、この壁を作つて、そういうものが内側に入られないようにしようとしても、ほばできない。もう全部が結びついてしまっていますから、遠い世界で何かが起きたことが自分のところに巡り巡って来る。ですから、グローバル化万歳、ではない。グローバル化しているのはそれぐらい、いわばみんなが結びついているがゆえに、一つ悪いことが大きく全

体を変えていくということはあり得ると。皆さんも覚えていると思いません。サブプライムローンという言い方がありました。本来だったらお金を借りられないような人が、土地や家屋が、これを担保に入れて、その人たちに銀行はどんどん貸していく。で、その債権を証券化して世界にばらまいたわけです。で、それが一つのきっかけになって、リーマンショックも起きる。私は何を言いたいかつていうと、私たちの資本主義は、それぐらいに、世界情勢というものによって、大きくこの安曇野の、ささやかに生きようとする人たちの生活すらも、直撃するということなんです。そして最後、これは曖昧性 Ambiguity なんです。よくわからない、曖昧で。白と黒がよくわからない。こういうことが、至る所に起きているわけです。

こうしたVUCAと対極的にそれらをあたかも既存のシステムの中に包摂できるとばかりに、AIを中心とする未来像が語られているのは、知つての通りです。将来、アートのAIに任せられるという考えに取り憑かれた人々が出て来るかもしれません。

そこでは、結局、人間とAIとの違いは何なのかが、問われることになるかもしれません。それほど、私たちの拠り所になる価値とは何なのかが問われているわけです。

私は両者を分つのは、アートの力だと信じています。それが、生み出す価値が、人間と人工知能を区別する唯一の根本的な価値だと思いません。それは、絶対に複製可能ではない価値です。人間に二人と同じ人がいないように、アートは、その唯一無二な性格において私たちに感動の喜びを与えてくれるからです。

美術館は、その規模の大小にかかわらず、それを体験できる、現代の「アジュール」であり、碌山美術館も、今後も、ずっとここ安曇野の地で後々の世代までアートの存在理由を伝えていって欲しいですし、またそれを継承して欲しいと願っています。ご清聴ありがとうございました。